

# 聖書日課 『からし種』 2025.12.28–2026.1.4

12月 28日 (日) 出エジ プト記 9章	「ファラオは、雨も雹(ひょう)も雷もやんだのを見て、またもや過ちを重ね、彼も彼の家臣も心を頑迷にした」(34節)。「十の災い」はファラオの頑迷さを示している。「今度ばかりはわたしが間違っていた」(27 節)とは口ばかり。「喉もと過ぎれば」、次の瞬間、神に背を向ける。私たちもまったく同じである。主の前に礼拝をささげる時にまず祈るべきは何だろうか。
29日 (月) 出エジ プト記 10章	「イスラエルの人々が住んでいる所にはどこでも光があった」(23節)。「暗闇の災い」とは何か。肉眼の視力を失っても、生き生きと信仰の希望に照らされている方がおられる。それを考えると、暗闇とは心の中に神も隣人もいない状態、何のために生きているのかわからない状態ではないか。神と隣人につなげられるとき、私たちの心は光に照らされ始める。
30日 (火) 出エジ プト記 11章	「そのとき、エジプトの国中の初子(ういご)は皆、死ぬ。王座に座しているファラオの子から、石臼をひく女奴隸の初子まで」(5節)。「初子」は神の祝福であり、その命は神の御手中にある。ファラオの「初子」も神のものであり、彼の思い通りにはならない。だから聖書は私たちに「初子をささげる信仰」を求める。神のものを神に返す時、祝福があふれて広がる。
31日 (水) 出エジ プト記 12章	「その夜、主は、彼らをエジプトの国から導き出すために寝ずの番をされた」(42節)。エジプト中で大いなる叫びが起こった夜(30 節)に、イスラエルの人々が無事に出発できたのは「寝ずの番をされた主」の執り成しの故であった。私たちの過ぎし一年の日々もまた、「寝ずの番をされる主」の執り成しの中に担われ、導かれ、守られてきたことを覚えて感謝したい。

# 聖書日課 『からし種』 2025.12.28–2026.1.4

1月1日 (木)	「すべての初子を聖別して、わたしにささげよ」(2節)。マリアとヨセフも初子イエスをささげた。天使の告知に始まり、自分たちの意志を超えた神の導きを体験してきた夫婦は、貧しい献げもの(ルカ 2:24)であっても心込めて準備し、感謝と献身の祈りを共に主の前にささげたことだろう。新しい一年、私たちはどうな祈りをもって神の前に歩もうとしているだろうか。	
2日 (金)	「ああ、我々は、何ということをしたのだろう。イスラエル人を労役から解放して去らせてしまったとは」(5節)。ファラオにとってイスラエル人は利益を生む労役の道具でしかなかった。「使える／使えない」。人を収奪の道具として見る考えは、今も社会のいたる所に巣くっている。神はそのような心の貧しさから解放するためにモーセを送り、主イエスを派遣された。	
出エジ プト記 14章	3日 (土)	「主よ、あなたの右の手は力によって輝く。主よ、あなたの右の手は敵を打ち碎く」(6節)。神の「右の手」は祝福、力、救いの源であり、神はご自身に依り頼む者の「右の手」をとて立ち上がらせてくださる。主イエスの「右の手」によって慰められ、癒され、新しい命を吹き込まれた一人ひとりを思う。新しい年、主の「右の手」を通していただく救いに期待して。
出エジ プト記 15章	4日 (日)	「荒れ野に入ると、イスラエルの人々の共同体全体はモーセとアロンに向かって不平を述べ立てた」(2節)。奴隸の身から解放されたイスラエルの人々。しかし、葦の海から旅立ち、荒れ野に入ったとたんに、エジプトは良かった！と昔を懐かしみ、モーセたちに向かって不平を述べ立てる。主の恵みによって、まだ見ぬ嗣業に向かっている希望を理解できない。